

多様なルーツをもつ人々と

多様な文化に ひらかれた学校づくり



浜田麻里 ● はまだまり

京都教育大学教授(日本語教育、異文化間教育)。文部科学省「外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議」委員(令和元年度)、「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」担当など歴任。

日本の現状

多様なルーツをもつ人々が増えている。

日本には以前から多くの在日コリアンの人々が暮らしているが、1980年代後半にはインドシナ難民や中国帰国者の人々、90年代には南米から日系人が帰国・渡日した。最近では技能実習生等が日本で就労するようになり、少子高齢化による労働力不足の日本社会を支えている。2020年末時点の在留外国人数は288万7,116人で、1980年末時点の78万2,910人の約3.7倍になった。国籍・地域別で見ると、1980年末時点では外国人のほとんどは韓国・朝鮮籍(84.9%)だったが、2020年末現在では、1位中国(27.0%)、2位ベトナム(15.5%)、3位韓国(14.8%)、4位フィリピン(9.7%)、5位ブラジル(7.2%)のように多様性も高まっている(出入国在留管理庁「在留外国人統計」)。

日本国籍であっても両親のどちら

かが外国人である「ミックスルーツ」* の人も増えている。父母の一方が外国籍である子どもの出生率は、現在20歳未満に当たる2001年以降生まれを平均すると2.0%である(厚生労働省「人口動態統計」)。つまり20歳未満の日本人の50人に1人は外国にもルーツをもっていることになる。

このように、すでに多様なルーツをもつ人々は日本社会の一員である。そして多様なルーツをもつ子どもたちは、今後の日本社会を担っていく存在となっている。彼ら、彼女らのもつ多様性がこの社会全体の財産として発揮されるよう、学校教育は彼ら、彼女らの可能性を十分に引き出すことができるものになる必要がある。そして多様なルーツをもたない子どもたちも、多様なルーツをもつ子どもたちとどのように「共生」していくのかを学ばなければならない。そのためには、まず学校そのものが多様な言語や文化にひらかれた場所になる必要がある。では、具体的にどうすればよいのだろうか。

マイノリティとマジョリティ

よく「異なる文化を理解する」というが、そんなに簡単なことではな



い。異なる文化が接触すると、その間には「力関係」が生まれがちだからである。強いほうは「マジョリティ」、弱いほうは「マイノリティ」とよばれる。何もしなければ、マイノリティはマジョリティへの同化を迫られるか、さもなくば社会から排除されることになる。誰しも何かしらの場面でマイノリティの立場になることはあるが、多様なルーツをもつ子どもたちはマイノリティの立場(いわゆるアウェーな感じ)にずっとあり続けているのである。しかも、少しでもマジョリティと違うことをすると、自分がマイノリティであることが露呈してしまい、いじめの標的になりかねない。知らずにルールを踏み外さないよう絶え間なく周囲に気を配りながら、多様なルーツをひた隠して子どもは暮らしている。

学校が多様なルーツをもつ子どもたちにとって、ほっとできる場になるためには、「マジョリティの日本文化 vs. マイノリティの文化」のような二項対立の関係にならないよう、「いろいろな文化」をシャッフルして、その中の一つとしての日本文化や〇〇文化のように位置づけることも一つの方法である。小学校なら、学校でいろいろな文化の遊びが行われて

いるとか、いろいろな言語の挨拶を学ぶ機会があるといったことからの雰囲気づくりも有効だろう。

また、自分自身の「常識」を疑ってみる。「普通」は単に日本人にとっての「普通」であるかもしれない。マジョリティの「普通」をマイノリティに無言で押しつけないようにするには、先生自身が「普通は〇〇するよ」「〇〇するのがあたりまえ」という言い方をやめることから始めることが必要かもしれない。

マイノリティに学ぶ

それでもマジョリティとマイノリティという境界がなくせないなら、マジョリティ側がマイノリティ側から学ぶという姿勢を常に示すことが重要である。マイノリティの文化をリスペクトする環境を社会や学校の中につくる。授業で積極的に多様な国や文化を取り上げるのもよい。例えば、音楽科で民族音楽を取り上げたり、家庭科で多様な食文化を扱ったりするのはどうだろう。地域在住の多様なルーツをもつ人々にゲストに来てもらうこともできる。

多様なルーツをもたないマジョリティの子どもたちにとって、多様な文化を知ることには重要な意味があ

る。日本人の中には、自分たちは他の民族より優れており、他の民族から学ぶことはないと考えている人たちがいるが、日本は世界でも飛び抜けて自殺率が高く、子どもの自尊感情が低い。この閉塞感を打破する知恵は、多様な文化との触れ合いの中にこそあるのかもしれない。

先生方の背中から子どもたちはたくさんのお話を学んでいる。先生が多様なルーツをもつ人々をリスペクトしながら、言語や文化の違いを軽やかに飛び越えて対応する姿を見せることは、子どもたちにとって何よりも大きな学びになるのではないだろうか。

そこで、先生方への宿題。次の例、先生方ならどうされるだろうか。

こんなとき、どうする？

遠足のお弁当の時間。皆で一斉に弁当箱を開けると、アウン君の弁当箱には大きなピザ1切れとりんご1個。周囲の子どもたちは「えー、お弁当にピザって変なの!」と大騒ぎ。担任は保護者に日本式の弁当の作り方を伝えておくべきだったのか。